

## 通信

### 書評

『現代インド研究』は、「現代インド地域研究」プロジェクトに関心を持つ全ての人々や団体のためのフォーラム誌たるべく創刊された。そのため、「通信」の欄を設けて、「研究途上の発見や仮説をコンパクトに提示する論考や、既出の論文・研究ノート等に対するコメントやそれに対する応答など」(本誌投稿規程第1項)も掲載できるようにしている。今のところ「通信」への投稿はないが、編集委員会としてはフォーラム誌として現代インド・南アジア研究に関する議論の多角化・活性化を図りたいと願っている。そこで、第3号から「通信」欄を活用して書評を掲載することにした。対象とする書物の選定や書評者の依頼は編集委員会で行うが、取り上げるのは近刊の南アジア研究書を原則としたい。良質な研究書を幅広く紹介することも大きな目的であるが、これをきっかけとして「通信」における議論の活性化につながれば幸いである。

丹羽京子『タゴール (Century Books 人と思想)』(東京:清水書院、2011年、264頁、893円、ISBN: 978-4-389-41119-0)

(評) 北田 信\*

19世紀後半から20世紀初頭、カルカッタは大英帝国の東半分を中心として機能し、そこにはヨーロッパ風の楼閣が立ち並び、ヨーロッパ最新のモードや映画などの娯楽がいち早く輸入され、人々は西欧風の都会生活を楽しんでいた。この時代に、新精神を表現するべく生まれたのが近代ベンガル語である。この新しい言語を使用して、新聞や啓蒙的書物、さらに“ノヴェル”や“ロマン”が著され、メガロポリスに暮らす人々の葛藤と苦悩を写すようになる。

ところが面白いことに、この新生の言語の成り立ちは、南アジアの辺境地ベンガルで話される平易簡明な民衆の言葉を礎石とし、これにサンスクリット語の語彙を豊富に加えて高度で抽象的な議論を行うことを可能にしたものだった。サンスクリットの造語法を用いて、西洋から大量輸入された新概念の訳語が作られた。この大がかりな新言語創造は、東京で関東方言と漢文の結合によって行われた作業によく似ているが、時間的には日本に先行していた。この新しい時代のベンガル語の文学に触れる者は、そこに、古のベンガル地方で盛んに信仰されていた密教の官能的法悦や、ラーダー・クリシュナの天上的愛の恍惚がいまなお溢れ、さらにそれがヨーロッパ世紀末の繊細な陰影と絶妙に混合されているのを味わうであろう。

---

\* 大阪大学大学院言語文化研究科准教授、中村元東方研究会連携研究員

・ 2012, *The Body of the Musician, An Annotated Translation and Study of the Pindotpatti-Prakarana of Sarngadeva's Sangitaratnakara*, Bern: Peter Lang.

・ 2012, "Caca Songs: 'The Oral Tradition in Kathmandu,'" in Hiroko Nagasaki (ed.) *Indian and Persian Prosody and Recitation*, Delhi: Saujanya Publications, pp.193-227.